

津田昇平教話 第七話

令和三年一月七日 朝の教話

体の丈夫を願え。体を作れ。何事も体がもと
なり。

おはようございます。令和三年一月七日をお迎えさせて頂きました。

てんちかねのかみ

天地金乃神様の願いを受けて、教祖様がお示しになられた信心というのは、私たち人間が、難しくなく、易しく、神様と仲良くできるように、それをととても大切になさって、歩んでいく道をお示し下さった。この道を歩いていけばいいよ、ということを教えて下さいました。

日々の暮らしの中で、どういう時に神様に祈ればいいのか、具体的に示して下さいましたね。その一つが、食事を頂く時、どういう心で神様にお礼を申し上げて、頂くのがよいのか。それがまあ昨日、食前訓しんぜんくんのことについてお話をさしてもらいました。

今日は食後訓ごうごんについて、少しお話をわして頂きましょう。食事を頂いた後、お唱えする。ご祈念するという方が、本当なんですけどね。唱えるということよりも、神様に祈念する。これは人として、こういう時に神様に祈って、お礼を申し上げて過ごすのが、人間として正しいことなんだよ、と。ただ、「いただきます」というふうな号令ではなくて、あれはご祈念なんです。教祖様が、どういつ時に祈念して過ごしたらいいのか、生きたらいいのかということをお教えて下さっているんです。

食事を頂く前には、

食物しょくもつはみな、人の命のために天地てんちのかみ乃神あたの造り与えたまう

ものぞ。何を食うにも飲むにも、ありがたくいただく心を忘れなよ。

一理Ⅲ 神訓しんくん 一・一三／二・一五一

というご祈念をさして頂く。その心で、神様にお礼を申し上げながら頂かしてもらおう。それが信心なんだよということをお示し下さり、食事が終わった後は、今度は、

体たいの丈夫じょうぶを願え。体たいを作れ。何事も体たいがもとなり。

一理Ⅲ 神訓 二・一六／二・一七一

というご祈念をまた、私たちはさして頂く。これは教祖様がそうしなさいというふうにして仰ったというよりは、教祖様のそのご理解ってというのが、お参りをされた方にお話をされ、後の方がまた食事を頂く時、食事が終わってから、そういう時に教祖様のみ教えというものを、もう一度改めて頂かしてもらって、食事と向かう。神様と向き合う。教祖様と向き合う。金光様とね、向き合っていくということを大切にさしてもらうよ、ということなんですね。

確かにそういうことがなかったら、スツとこう、「いただきます」「いただきます」で、終わってしまいそうですもんねえ。でも、食事訓がある

と、そこで立ち止まって、神様に「祈念させて頂く」ことができそうです。
これはこれでやっぱり良かったなあと思います。

お手洗い行って、トイレ訓くがあるわけでもないんですけど、トイレ前訓ぜんく
とか、トイレ後訓ごくとかあるわけじゃないんですけれども、ほんととはそれ
があってもいいのかもしれないね。寝る時でも、就寝前の訓があった
り、目が覚めてからの訓があっても、ほんとはいいでしょ。つま
り、日々の暮らしの中で、神様と共に生きていく、神様といつもお話を
しながら暮らしていくというのが、人間としてとても大切なことで、
それが本来の生き方なんだよということを、教えて下さってるわけです。

では、この食後訓ですけれども、二つのご理解から成り立っています。一つは「体の丈夫を願え」というものですね。これも神訓しんくんにある。次のもう一つ、また神訓に「体たいを作れ。何事も体たいがもとなり」っていうふうなご理解がある。一つの教えというよりも、二つの短いご理解が連なってる状態になってますね。

ここでよく、私がお話をさして頂くのは、「体の丈夫を願え」これは誰が誰に願うのかって言ったら、もちろん唱えている、食事を頂いた私という人間が神様をお願いを下さいよ、ということ。体からだの丈夫、今頂いた食事というものが、自分の命を作ってくれてる。命を維持するために、力になって下さる。で、頂いているものも、動物やら植物やら、そっ

た命ですよ。命を神様に恵んで頂いている。生きるために、人の命のために、神様がご用意して下さって、目の前の食事、それをありがたく頂く。「勿体ないな。当たり前じゃないなあ。ありがとうございます」という心で頂く。

そして頂いたものをしっかりと、自分の命の中に取り込ませて頂いて、命を、ここから働きを全うして頂くために、そのためにお願いしていくわけですけど、まあそんな時に、自分の体の体からだの丈夫たいというのは、体の健康のことですね。体が健康であるように、体が事故、怪我けがないように、丈夫であるように、そのことを神様をお願いしなさいと。ただ頂いたらそれで体が丈夫になる、健康になるというもんじゃないんだよ。頂いた

ものをしっかりとお願いを下さい、と。健康であるように、体が元気になるように、丈夫であるように、怪我をしにくかったり、病気になるにくかったり、なってもすぐに治りやすいようなね、そういう丈夫な体を願いました。

自分なりにということだと思います。生まれ持って、体が弱いという方だっというらっしゃるでしょうね。胃腸がとても生まれつき弱いという方もおられます。でも、人と比べることはできませんけれど、自分が頂いた命ですから、自分が頂いた中での精一杯の体の丈夫、健康というものは、頂きたいもんですし、それを神様にお願いしたら神様も一生懸命働いて、できる限り、できる限り、神様にできる限り、体の丈夫と

いうものを、おかげを授けようとして下さいます。

でもそのためには、体の丈夫を私という人間が、お願いしていくというところが、すごく大事なんです。神様に、「どうぞ体を丈夫にして下さい。健康にして下さい。病気になるだけならんように過ごして下さい」と、神様をお願いをさして頂くということですね。これが大事です。体の丈夫を願え。

で、次、「体を作れ」と仰るんですね。これ、「体を作れ」っていうのは、誰がって言ったたら、私が。誰に対して言ったのかというと、これ、私が、私に。いやいや、神様が私に、ということがほんとなんでしょうね。

「体の丈夫を願え」は分かります。「体を作れ」、作るのは私なんです
ね。「作れ」って言うてるのは、神様が私に対してという方が、解釈とし
ては正しくて、最初の「体の丈夫を願え」ってというのは、私が、神様に、
願え。

じゃ今度、「体を作れ」は、神様が私に「体を作れよ」と、まあお諭し
下さってるわけですね。体を丈夫にして下さいって神様をお願いする。
そしたら今度は神様から、分かったと。じゃあ体を丈夫にしていきなさ
いよ、と言われるんですよ。おかげは神様が下さるんですよ。

でも神様だけでは、おかげは授けることはできない。おかげは神様に
お願いしたら、おかげを用意して下さいさうとしますね。でも、私という

人間が、おかげを受け取る、キャッチする器というものを作っていないか
ったら、神様が授けようとしても、受け取ることはできません。体たいの
丈夫を私が願うのであれば、願ったことを、私も願いに沿うように、願
いが叶かなうように、行動していくということ。それがとても大事だよって
いうことを仰る。だから、「体たいの丈夫をお願いします」って、私が神様に
お願いしてるんですけど、逆に神様も、私に対して言われるんです。「体たい
を作りなさいよ」言つて。「あれね、私がお願いしてるのになあ…」って
言ったら、神様としたら、「おかげは授けてやろうと思って作るけれど、
おまえの受け物が悪かったら授けようがないから、ちゃんと作るんやで」
っていうことをまあ、要するところは仰るんですね。

じゃあ「体たいを作れ」ってどういうことかっていうと、これもよく例えで言うんですけどね、子どもがお腹を下してたとしましょう。お腹が痛いなあと。でも夏のアツたかい、暑い日で、お母さんが買い物に行つて、じゃあアイスクリームを買つて来てくれたと。もうアイスクリームは大好物や。食べたいなあ…って思う。でも、自分のお腹はつて言うたら、すごく下してる。調子が悪い。ご飯もあんまり受け付けない。食欲もない。トイレによく駆け込むような状況だ。

じゃあこれ、アイスクリーム食べていいかなあとかいうふうに考えたら、ちょっとやめた方がいいねと。お腹を下してる時に、冷たいものと

いうのは、胃腸に負担をかける。ちょっとやめた方がいい。大人であれば、脂っこいものはちょっと控えた方がいいね。ああ、唐揚げ好きやけどなあ。とんかつ美味しそうなあ。でも、ちょっと考えた方がいいね。消化にいいもの、おなかに優しいもの、そういった方がいいねって、まあなるわけですよね。

じゃあ、そんな時に私が「アイスクリーム食べたいなあ。お腹下してるけど、でもお母さん買ってくれたし、食べたいわ。いいわ、食べたいわ」って、これ食べたら、口で神様に「体を丈夫にして下さい、お腹痛いの治して下さい」って、お参りして、お結果けっかでお届けして、「ご祈念たもつて、「神様、お腹痛いの治して下さい」ってお願いしてるのに、体の丈夫を願っ

てるのに、アイスクリームがあるから「あ、食べよう食べよう。お腹痛いけどなあ。もういいや、食べよう」「ってこれ、食べてしまったとしましょう。じゃあなかなかやっぱり、体に負担ありますね。お腹に負担がある。じゃあ治りにくい。やっぱりお腹を下したまんまやし、お腹が急にまた痛くなるかもしれない。

これ、私という人間は、体の丈夫たいを作ってますか。神様に「体の丈夫たいを願え」ってお願いしてるんだけど、私という人間は、神様のおかげを頂けるように、ちゃんと自分でも体を大切にできてるかなって考えたら、それができてなかったっていうことになりますねえ。本当は食べた

いけれども、ちよつと置いて、たとえ兄弟が食べててもちよつと置いて、お腹が元気になったら、また頂いたらいい。「これは僕の分」って言って、置いてもらったらそれでいいんですけど、そこを無理して食べてしまう。

やってしまったら、神様にお願いしているのにも関わらず、私という人間は、願ってることとは違うことをしてしまってるという事になってくるんですね。そうするより、「わめぬ」で願って心で願わず「うとうふうな感じになっちゃおう。□では神様に」どうぞお腹痛いの治して下さい。お腹下してるから、痛いから治して下さい」とお願いしてるけれども、□では願ってるんだけど、じゃあ自分は何をしているのかという事、

冷たいもの、脂っこいものを食べてしまう。ほんとは食べたらいかんと
思っても、やってしまうっていうんではこれ、自分自身が願ってるこ
ろに、自分の命を浴わせるというお稽古けいこができてないってことになるん
です。

つまり、おかげを頂く器というものを、自分が作ろうとお稽古してい
ないってことになりますね。こうしたら、おかげを授けたくっても授け
ることができないよっていうことを、神様仰る。だから神様は、『体たいの
丈夫を願え』ってそら、願ってくれたらおかげは授けるけれども、あな
たも体たいを作ったいていきなさいよ。願うばかりじゃいかんよ。お願いしな
がら、願いとするとところをお稽古していくんだよ」ということを諭さとして

下さっている。だから、願ったたら後はなんだっていいんや、好き勝手していいんや、っていうんじゃあないんです。

ここが、話を聞いて助かる道かどうかの境目になるんですね。お腹が痛いから、お参りして、お願いして、あるいは、ご祈念してもらって、

きねんきとう

祈念祈禱で治してもらったら、後はもう自分の好きなことしたらええわ。

飲みたいもん、食いたいもん食べよう。でもお腹痛いなあ、治れへんなあ…。これじゃあまあ、信心してるということにはならないんですね。

神様にお願いしながら、自分もまたおかげを頂けるように器を作っていく。これがすごく大事なことです。お願いしながら、お願いするところを自分もそこに浴わしていく。神様と、私という人間とが、一緒に

共同作業と言ったらまあおこがましいですけどね。神様のおかげなんですけど、全部。でも、自分もまたおかげの中で、神様のおかげをまたキャッシュでできるように浴わしていくということは、やっぱり大事なんです。それがなかったら、いくら料理をお母さんが作って、神様という親様が作って、さあどうぞと言つてもですよ、こちらが器がなかったら、頂きようがない、受け取りようがないですよ。

だから神様としても、「しっかり神様に願いなさい」「っていうのと」「願いながら願つてるところを、あなたも自分で願うだけじゃなくって、本当の願いであれば口先だけじゃなくって、その願いとするところに、自分の命を浴わしていくんやで」ということを教えて下さる。そうして神

様と人間とが共同作業で、つまりこれは「あいよかけよ」って言うんですけどね。神様と人間とが、あいよかけよで、そしておかげを頂くことができる。おかげが頂きやすくなっていくということが、信心になるわけですね。短い言葉ではあるんですけども、ここにあいよかけよというのが、よく現れていると思います。

「体たいを作れ。何事も体たいがもとなり」これはもう、ほんとにその通りですねえ。何をするんでも、体が元気やなかったらできないですもんね。歩くこともそうやし、呼吸することもそうやし、遊びに行きたいなあ、クラブ活動したい、勉強したい。仕事せんといかなあ、育児しよう、洗濯

しよう。まあ何にしたって、やっぱり怪我けがをしてたり、体調が悪かったら、もう寝込むしかないし、寝たきりかもしれないし。それじゃあ、したいって気持ちがあってもできないですよねえ。

だからやっぱり体っていうのは、大事なんですね。もちろんまあ体だけじゃなくって、心とかねえ、もちろん体の健康、心の健康、お金の健康、人間関係、仕事、家庭、学校、いろんなところでおかげを頂いていかなくちゃいけないですよね。でも、なかならずく体というものは、ほんとにそれがあって全てスタートしますからねえ。体がなかったら、もう生きてるんじゃないくて、そりゃあ亡くなってるってことになります。だから体はやっぱりないと、この世で生きるということができませぬ。だから

ら、何事も体たいがもとなり。何をなにするんでも、この体たいというのが大事になる。

さらに言いましたら、信心も、体からだがないと信心はできませんよ。ね。体があるから信心ができる。肉体がある間だけが、信心ができる。亡くなってから信心ができるのであれば、まあ別に今そんなに信心せんでも、後で、まあ亡くなってからあの世でしっかり信心したらええわと思っても、そうはいかないんですよ。生きてる間にしか、信心することはできない。

だから、しっかりと生きているこの肉体がある間に、よくお参りをしけしこて、よく話を聞いて、よくお稽古けしこをして。これ、肉体があるからです。肉

体の中に、ほんとに手もあるし、足もあるし、耳もあるしね、理解できる頭もあるし、心臓も働いて下さって、呼吸も出来て、考えることもできて、見つめることもできて、願うこともできて、これ全部、肉体というものがあってのことなんです。まあ、肉体さえあればいいという問題じゃあないし、肉体が肉体としての働きがあるためには、神様から分け頂いているたましい、分け御霊様みたまが必要なわけですけども、そうだけけれども、とは言うても、分け御霊様だけやったらそれ、御霊様ですからねえ。あの世に行ってる人とおんなじになっちゃってしまいます。

違いはというと、肉体があるかどうかなんです。肉体というものたましいがこもって、分け御霊がこもって、そして初めて生命活動がス

タートするわけだね。

って考えたら、信心しておかげを頂いていく。前々のめぐり合わせがあって苦しむ。先祖からの知らず知らずのご無礼。お礼が足りない、行き届かない、当たり前と思っっている、恩知らず。そういったところから、天地に対してのご無礼が重なって、お礼が無いことが重なって、ご無礼、お粗末、不行き届きのその塊かたまりとして、めぐりというふうにしてね、難儀なんぎを生み出すような、まあ蜂はちの巣のようなものですね。蜂が、一個一個が、まあ言ったら難儀やと思ったら、蜂の巣ができる。巨大なスズメバチの巣が出来たんやと思っって、じゃあ自分やら、子どもやら、ご先祖やらにどんどん襲いかかってくるようなものですねえ。

でもそこをまあ、しっかりと信心して、根っこから断ち切って頂くと
いうことが大事になるわけです。これは信心にとっても大事なんですけ
ど、それもこの体があったてのことです。だから体はほんとに大事なこ
やなあと思いますね。そういう意味じゃあ、食事を頂いた後も、「体の丈^{たい}
夫を願え。体を^{たい}作れ。何事も体^{たい}がもとなり」ということは、とっても大事
なことやなと思いますね。

頂きたくても、頂くことができないっていうことだって、もちろんあ
るんですよ。そういう体の病もあれば、心が病んで、そうやって頂きた
くても頂くことができないという方、もちろんいらっしやいますからね。

だから頂くことができるということとは、本当にそれ自体が、すごくありがたいことなんですよね。

食事を頂きたくっても、ほんとに口から受け付けなかったりとかね。お腹にそのまんま管を入れるということもある。あるいは心が苦しくて、しんどくって、頂くという心になれなかったり、逆に頂き過ぎて、上手くセーブができなかったり、そうやって上手くコントロールがしづらくって、苦しむということもあります。体も心もそうですよねえ。

もっと言ったら、お金の面でも苦しんだら、お金の難儀なんぎができたらどうなるかって言ったら、買う物、食べる物がないということもあるかもしれないよ。あるいは、食べる物はあったとしても、家の中か、家庭の

中がぐちゃぐちゃやったら、もう食べることもできるような状況じゃないかもしれないよね。そう思ったら、食事を頂くことができるというのは、ものすごくそれ自体が、おかげを頂かないとできないということなんですネ。

そう思うと、やっぱり神様にお礼を申し上げて、そして恵んで頂いたものを頂くことは、ほんとに理にかなっている。お礼を申して頂く。頂いたものが、しっかりと無駄むだにならないように、丈夫になるようにお願いしながら、お願いだけじゃダメで、自分もやっぱり願ってるところに合わせて、体を健康にしていく。これは今言った、お腹下しているから冷たいものを我慢するということだけじゃなくて、私やったら基本的

に一日中お結界座けっかいってますんでね、やっぱり足腰あしこっていうのは弱っちゃ
うんですよねえ。だからこのままじゃあ腰が痛くなったりとか、どうし
ても左を向いちやいますでしょ。いや、これもうずっと、二十年以上毎
日のように、一日何時間も、八時間か十時間か分かりませんが、ず
っとやっていると、やっぱり知らず知らずで、話を聴こうと思つと左に重
心がかかってくるとね、やっぱりこう坐骨神経痛ざこつしんけいとうっていうわけじゃない
かもしれないけど、ヘルニアじゃないかもしれないけど、やっぱり痛く
なってくるんですよねえ、これ長年やってるじ。

でもこれじゃあ御用が差し支えてしまつんで、何年か前ぐらいから、
ちよっと体を、御用、御用言つても、御用が御用になるためには、体はや

っぱり体たいの丈夫を願わんといかんけれども、体たいを作らんといかんあと
いうふうにして、このみ教えをまた自分なりに頂いて、少しこきう体を鍛
えたりとか。御用が終わってから、閉門してから、時間のお繰り合わせ
頂いたら歩かして頂いたりとか。そして、御用さして頂く上に必要な体
作りをお願いして、お願いするだけじゃなくて、自分なりに少しずつで
もやっぱり作らして頂く。「体たいを作れ」をさして頂く。それがないとや
り、御用が御用として成り立たないんですよ。

人を助けよう、神様の願いに少しでも生きさしてもらい、使って頂い
うと思っても、そのためにもやっぱり体たいの丈夫っていうのは大事ですん
でね。

そういうことで、毎日一日三食頂ける方は頂くとおもうんですけれど、その時も、これも神様がお恵み下さっているものをありがたく頂く。そして体の丈夫を願いましょう。で、願うだけじゃなくて自分でも願って、いるところになろうような自分になれるように、お稽古をさびしてもらう。我慢したり、あるいはいっかりと体を動かしたりとかね。暴飲暴食とか、睡眠不足とかもそうですよね、なんでもまあ、ゲームし過ぎとか、勉強し過ぎとかいうので、体が、身が持たないということがないように、健康をお願いしながら、自分でも体を、健康のおかげを頂けるような器づくりをそれぞれ、わが身わが一家を練習帳にして、お稽古さして頂き

たいと思います。

今日も共々にお稽古さして頂きましょう。よくお参りでした。

了



津田昇平教話 第七話

令和三年一月七日 朝の教話

令和四年一月十四日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
